



心
流
語
録
中

5
2116

林
文
政



Handwritten text in a cursive script, possibly a signature or a name, located on the right page of the manuscript.

Faint handwritten text or markings on the left page, possibly bleed-through from the reverse side.

Handwritten text in a cursive script, located in the lower middle section of the left page.

Handwritten text in a cursive script, located in the upper middle section of the left page.

Handwritten text in a cursive script, located in the upper left section of the left page.

Handwritten text in a cursive script, located in the upper left section of the left page.

Handwritten text in a cursive script, located in the upper left section of the left page.

Handwritten text in a cursive script, located in the lower middle section of the left page.

Handwritten text in a cursive script, located in the lower middle section of the left page.

Handwritten text in a cursive script, located in the lower middle section of the left page.

Red stamp or marking in the top left corner of the left page, containing some illegible characters.

門へ利5
孫 2.116
巻

白勺
勺作
等類
雜類

白勺白勺
讀名新白
文章

抱菴院



舊門詠語流下

附白乃奉

藤野潔氏遺愛記



明治四十一年四月廿四日

藤野 漸 氏寄贈

舊日書のむむう〜と極く〜とるり得る〜と分る
三愛あり昔と身由と昔〜と中法と身由とり〜と
日今〜とるり〜と〜と白の位と〜と分る〜と〜と
附々之本倒〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
西風〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

分々海と為り事あり一極の白く分れ花のやうな
一花表しと心跡まじく一併するしと云ふ事
洲渚もよくあり能くわらわら極くはくしと云ふ
油分道とせしむるあり
秋池と云ふはわり白く
まじりて心と云ふ事一歩にゆく事
はよ〜心と云ふ事一歩にゆく事
あるにたり

景をいふ事つと云ふ事一と云ふ事地形人事は

多敷の遊る事やれ形容をより〜あり

分りれ事あり〜あり

心月をわかれ〜あり

心月をわかれ〜あり

其角田分り〜あり
尾流〜あり

空より油提ゆ〜あり

と〜あり
〜あり

下

こゝろいこゝろ分派遊の服と分つて
おゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

る東の中にいふのが将

とてふ向と分つて思のさそやとていふ
くろ小猿養の弁仙へおゝゝゝゝゝゝゝ
白

うれ世れんさあらんや小那なま

とてふ向の向さうなれいけらなれい
ていへれ愛へか多時のうれい
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

翁の衰病へきぬて境東ふふあふふ
とが将へいころころう血動へあむ
とらへてさうてうやこれと癖いふ
利体の葉の湯ふあひて事と好む
をさそらちへてはあへてさへ
別体へてく不興へて新古れ目利
をいふはあてさへていふお
へて葉の湯ふあひていふはあ
へてお好むとてさへていふはあ

業と位と徳と一なるを以てしては
附物とて其の徳を以てしては
業と一なるを以てしては

附物とて其の徳を以てしては
業と一なるを以てしては

附物とて其の徳を以てしては
業と一なるを以てしては
附物とて其の徳を以てしては
業と一なるを以てしては

白鳥

先師の行方十中條の徳と一なるを以てしては
附物とて其の徳を以てしては
業と一なるを以てしては
附物とて其の徳を以てしては
業と一なるを以てしては
附物とて其の徳を以てしては
業と一なるを以てしては

わがまゝのまゝなまのまゝなまのまゝなまのまゝなまのまゝなまのまゝ
まのまゝなまのまゝなまのまゝなまのまゝなまのまゝなまのまゝ
なまのまゝなまのまゝなまのまゝなまのまゝなまのまゝなまのまゝ
なまのまゝなまのまゝなまのまゝなまのまゝなまのまゝなまのまゝ
なまのまゝなまのまゝなまのまゝなまのまゝなまのまゝなまのまゝ
なまのまゝなまのまゝなまのまゝなまのまゝなまのまゝなまのまゝ
なまのまゝなまのまゝなまのまゝなまのまゝなまのまゝなまのまゝ
なまのまゝなまのまゝなまのまゝなまのまゝなまのまゝなまのまゝ

菖蒲句と附句は區別の事

菖蒲句より編の物方と平句も此とありけり位
の事と懸く事多し程に信とん言ふ事
才又同菖蒲句より平句も此とありけり位
也

菖蒲句と平句の事

信佳

是ら並に... 付句... 菖蒲句... 平句... 菖蒲句... 平句... 菖蒲句... 平句...
菖蒲句... 平句... 菖蒲句... 平句... 菖蒲句... 平句... 菖蒲句... 平句...
菖蒲句... 平句... 菖蒲句... 平句... 菖蒲句... 平句... 菖蒲句... 平句...

川もやぶすかき草の花

亀箱

是ら水多し身を流るるをこらふ儂ありとて荒句
すまや〜〜と昔回つて〜〜と〜〜と舟を〜〜と流
〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と

古き方回を〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と

山里を果て〜〜と〜〜と〜〜と

〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と
〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と
〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と
〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と

海に田耕を〜〜と〜〜と〜〜と

〜〜と〜〜と〜〜と

〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と

道に〜〜と〜〜と〜〜と

〜〜と〜〜と〜〜と

瓜の畑の〜〜と〜〜と〜〜と

〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と

〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と

〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と

何と〜〜〜

ふらふらおれんふらふら事〜人二人ふらふら
何事〜〜人〜

其角田〜〜〜
〜の貴や〜と作〜
〜のわ〜と作〜

おんおぬを〜〜
〜我孫の胸の〜
〜小義と首を〜
〜断腸乃〜と仰ひを〜
〜と〜

昔ら海ら〜〜
〜小名と〜と〜
〜と〜と〜と〜

...

名をとりて... 板敷の... ぬき...
名をとりて... 板敷の... ぬき...

大... 七十一 任口

舟丹の... 舟丹の... 舟丹の...
舟丹の... 舟丹の... 舟丹の...

... 舟丹の... 舟丹の... 舟丹の...
... 舟丹の... 舟丹の... 舟丹の...

...

時の来ふまじし〜 花のよめふらふ〜 小葉のよめふらふ
花のよめふらふ〜 花のよめふらふ〜 花のよめふらふ
おのゝこゝろ〜 花のよめふらふ〜 花のよめふらふ
〜 花のよめふらふ〜 花のよめふらふ

今門の事先師乃愛風と志〜 花のよめふらふ〜 花のよめふらふ
花のよめふらふ〜 花のよめふらふ〜 花のよめふらふ
花のよめふらふ〜 花のよめふらふ〜 花のよめふらふ
花のよめふらふ〜 花のよめふらふ〜 花のよめふらふ

〜 花のよめふらふ〜 花のよめふらふ〜 花のよめふらふ
花のよめふらふ〜 花のよめふらふ〜 花のよめふらふ
花のよめふらふ〜 花のよめふらふ〜 花のよめふらふ
花のよめふらふ〜 花のよめふらふ〜 花のよめふらふ

此のいふくは白のまじりて白の白濁のまじりて
憐れむと云ふは白濁のまじりて白濁のまじりて
肉の根のまじりて白濁のまじりて白濁のまじりて
おとろくは白濁のまじりて白濁のまじりて白濁のまじりて
色ふと云ふは白濁のまじりて白濁のまじりて白濁のまじりて
河原のまじりて白濁のまじりて白濁のまじりて
のまじりて白濁のまじりて白濁のまじりて白濁のまじりて
まじりて白濁のまじりて白濁のまじりて白濁のまじりて
まじりて白濁のまじりて白濁のまじりて白濁のまじりて

白濁のまじりて白濁のまじりて白濁のまじりて
と云ふ人の甲冑を帯て戦場へまじりて白濁のまじりて
うらむと云ふは白濁のまじりて白濁のまじりて白濁のまじりて
おとろくは白濁のまじりて白濁のまじりて白濁のまじりて
花のまじりて白濁のまじりて白濁のまじりて白濁のまじりて
先師のまじりて白濁のまじりて白濁のまじりて白濁のまじりて
白濁のまじりて白濁のまじりて白濁のまじりて白濁のまじりて
あはれと云ふは白濁のまじりて白濁のまじりて白濁のまじりて
まじりて白濁のまじりて白濁のまじりて白濁のまじりて

路通

傳は先師の如くおぼしき事なりしや傳ふ事
 又此後の中いなき事なり先師あり左根の事なり
 いさゝかおぼしき事なり此後の中いなき事なり
 能くしる事なりしや此後の中いなき事なり
 是れは先師の如くおぼしき事なり
 此後の中いなき事なり
 先師の如くおぼしき事なり
 此後の中いなき事なり

先師の如くおぼしき事なり
 此後の中いなき事なり

先師の如くおぼしき事なり
 此後の中いなき事なり
 先師の如くおぼしき事なり
 此後の中いなき事なり
 先師の如くおぼしき事なり
 此後の中いなき事なり

唐那くは根くは雲のかくは根なり

いふようくからぬいひあるや自由化句の事
とてかぬ程の事あるけら小技うらまはと化句
お笑のなるれ句うら小技う事と化句の事
ひらきうら又自由化句の事と化句の事
うらやすあき化句の事

即地口をよめぬ
うらうらぬ事と化句の事
会せ化句の事と化句の事
やううら自由化句の事

と柳乃派
是を垂垂相葉の場なり派
の事か改派の事

新葉や井の子の料
いさうられ神入らぬ事
はげの水はらぬ事

これ法にふれ水と米と水とく白とと喰ひて
中と是米あり赤と之法徳の水と白と一考つる依
法にその水といふとをさすはくく是く作らば此
場くも、ハ米乃の白とより赤と法徳不やく中り
常々米乃をさるべし

又庫くは木の肴のひかー 柳子

一寸れ紋乃芥りーじくぬ 其角

け白ゆらぬの事なるべしーゆらぬのくくおうく
ゆらぬ愛するべしー米の白くゆらぬのくくどうくゆらぬ

米と白くくさるらゆらぬらりとさるーこれらゆらぬ
とらぬ後ふらぬ半粒もく中ぬらとー或ハ水産
よくさるる米飯喰やーの事さるーと是作ら
いすーゆらぬー

支考四粒の水ー落るるさるくさるゆらぬ印さ
風情けとちよくくゆらぬのくく水のさるとくふ
七ふらゆらぬア考子の備りーゆらぬ山吹と云交をさ
うゆらぬーゆらぬとよゆらぬゆらぬゆらぬゆらぬ
すらのぬとゆらぬゆらぬゆらぬゆらぬゆらぬゆらぬ

月夜のふらふらと秋のまよひのうらみ
こぼれわたるる涙のうらみ
さびしきうらみ

木暮がたうらみのうらみ

とらふらふらと秋のまよひのうらみ
こぼれわたるる涙のうらみ
さびしきうらみ

湖濱の風姿風情とて中をたれ湖濱
うらみとて月夜とてうらみ
さびしきうらみ

風情とて月夜とてうらみ
さびしきうらみ
うらみのうらみ

池の名大つこの名飛〜
なま〜や長橋のつ〜
ろ〜〜と強き〜
去まら

湖の水まらとせらと かりりらめ

と〜るまら〜ふ湖鏡つ面〜
み〜ぬハ草と立き〜
時〜つひ取とつひ〜
と〜つ〜

〜る警者の〜

去ま田賢人義士乃類の澄乃〜
とた〜らああり事〜

けりまあ〜これ〜

けら〜高おう強〜
けら〜よ〜あな〜
平田湖水懐膝〜
〜〜〜
た〜〜け〜あ〜

ふよのよと平口舟一言毎一徹とけしよ一をいふ長
流りいづここれ感す一まき舟を流去勢波り疾
まき舟を平らとけ情一舟一舟是の人と感動
まき舟を平らとけ情一舟一舟是の人と感動
まき舟を平らとけ情一舟一舟是の人と感動
まき舟を平らとけ情一舟一舟是の人と感動

等類乃事一

藤田中明つらう一秋一

法源や波りちうる義 夏乃月

これらふれつらうこれ頃固女う汗一

一葉の目よまきくつら事一

や作らぬまに法源のうと事一

法源や波りちうる義 松葉

去其の和舟よ八作舟と流一

まき舟を平らとけ情一舟一舟是の人と感動

まき舟を平らとけ情一舟一舟是の人と感動

後義撰の時

而揖よ明石の中きり部一

脚水

其角回はらるる所の撰のあれ帯りかやうなのら
乃き歌るり師の撰の本ら多く風景とんをー糸
まゆーらーらあうりは地うーらやーく撰乃本ま
とらつ兼指路は指ひあらやーらたららとら地回とらハ
つ兼ゆるのーやーくむとらとらとら其田を歌中ハ
春うーらー田楽のらるり

件ら四

新歌のーとらせり 田乃秋

とららとらーと史料のーらとら後ハ新乃而せり

の昔の葉のられは伝へらーとらとらとらとら
らら昔のーやうら古の詞とらーあらとらと
昔のおしてとらとれとらとらとらとらとらとらとら
の裏とらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら
とらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら
とらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら
とらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら

外席やうーとらとらとらとらとら

とらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら
とらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら
とらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら
とらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら

とらふありこれ等難ありと云ふもとていふこと
しつかりきりやうやう其のしげらの意と荷とを
やうしつかり

舟乃らるるふ荷をいふやう
丁種とのきあつたをいふやう

支考曰順徳院乃卿制也

ちくまにまじりぬるをいふやう
を叙傳部の連系

水乃らるるいふやう

とらふら法をいふやう
此らうららハ法ありとて述傳部の事

文章の事

森田等と述傳の文章とらるる
やうも或ハ如等の文章ハ法をいふやう
一くえやう一或ハ人信といふやう
一或ハまくと探りりしとて西鶴らばらあつた

とらるる一縦横自をとありしころもいつの意と
とけりあるてい音連歌のぬい物はうーとあふ果
と松坂とは舞とるせふか甚き下れりるうー
當時のそまきとらんうーせれ白の海緯るり花と
うーとらるれきりと海とゆへ

支考四語奇よし文章られ連歌よし文章らり
文章いとせうとむらむらとのるりせれはうー
杜陵と学いよし奇よし人老とーぬ連奇よし
と祇あり徳治とら芭蕉ありうー文よし人とし

つめつよし乃とととれとま奇よし文章の芳操
とととととのつとら奇よし判とととととと
独ころものぬちりと伝ふ連奇いととととと
ととととんやとととととととととととととと
蕉の筆跡よりとととととととととととととと
賦詩頌乃神とととととととととととととと

昔も徳治の文章いととととととととととととと
腰おるく浮言困成り物とととととととととととと
とととととととととととととととととととととと

才了—文章の書き要として—教書記法乃
 即論—の題と才了—文章の記法と云—
 篇の新録—の題と才了—の法より—
 二つを総と—の題と才了—の法より—
 以後—の才了—の法より—
 一—の法より—の法より—
 才了—の法より—の法より—
 法を述べて—

新法

卷四—の法より—の法より—
 乃法と云—の法より—
 才了—の法より—
 一—の法より—
 二—の法より—
 三—の法より—
 四—の法より—
 五—の法より—

指さしてあはれとて一人の風神中位一羽の指さして
 され理を忘れゆらんかたは心の伝はり
 風神の道すち大いなる心なれどあつたは
 吾東とて一輪負たの心なれどあつたは
 細ふとのありははる風神の心なれどあつたは
 忘者れ妻子殿とゆらん一店をれ心なれどあつたは
 りはる心なれどあつたは又それ言
 貴いといふ心なれどあつたは又それ言
 りはる心なれどあつたは又それ言

指さしてあはれとて一人の風神中位一羽の指さして
 され理を忘れゆらんかたは心の伝はり
 風神の道すち大いなる心なれどあつたは
 吾東とて一輪負たの心なれどあつたは
 細ふとのありははる風神の心なれどあつたは
 忘者れ妻子殿とゆらん一店をれ心なれどあつたは
 りはる心なれどあつたは又それ言
 貴いといふ心なれどあつたは又それ言
 りはる心なれどあつたは又それ言

其角曰依り神佛の神佛の
返と犯して五編とせむもその心又と胸うり負
ふりたして〜や〜も〜
りたしてある〜
家と受らぬ状〜
負物〜
其の戻〜
おれやあ〜
と辞世〜

そら〜
と人〜
おれ〜
之目や〜
雙六かせの〜
掛〜
おれ〜

おれ〜
おれ〜
おれ〜

のたふしに引かへていふは〜
 蕉「のち美隆世との人のしつゝ〜
 中との〜
 ち〜
 蕉「ふ入ふ〜
 ち〜
 の〜
 伴〜
 披〜

支考、あまも帯小い人〜
 中其角ハ蕉翁才一のち〜
 の風〜
 ち〜
 支考、四つ初のち〜
 一〜
 ち〜
 ち〜
 ち〜
 ち〜

論小乃と

帝まかれまれの風程も師をうけ

かゝ風程も師をゆく程と一つふをわかれ先師の

心人のもう一を懐くさう物もふ月と之程

と師の心もやうすし一を後居うか

とさうありさうくひさか信する味もさう

師乃神樂事とくさうと程も人あり師曰御遊と

平法と田必事と一神樂事とひるさうと師の深

さうさうと師の心と後人の心と一師曰御

一の神道一ハ神樂教と師小師事とくさうと

一かかたしてさうと師遊と師神樂教お

うさうと

師曰師神遊と師事とくさうと師とさうと

師事とさうと

師曰師事と師事とさうと師事小師事とさう

さう師の感給さうと師事の中へ師事と

さうさうと師事とさうと師事とさうと

師事とさうと師事とさうと師事と

風流く平々風流き名を——半いづよ海白ゆら
田寂く——山井——のふか化とら半とほくまの
花とや昔回——るる海白我と好く可くの——
と角う好く飛たけ飯ふれきと流流ら伝達見家——
——く伝言の——く——青面ふふ物——と——と好きとせら
下の相違く故うゆと其角とらとをたをとととれと
家、風ハ家寂と好くして細——と角う風と伝達と好く
知——と細と好くあうはる利

其角う門人——と角うのふか化と好く——流流ら門葉と
流流ら自物と好く流流の流流の件——と角うのふ
通る自物と好く流流とれ血脈お好とら物と流と
連流と撰く——と——先師一代——流と——の面と好
人と流流せと

支考四有流の物と好く流流とらとと流流の事と好く石
——と流流と好く——と好く——と好く——と好く——と好く——と好く——
と人情ふ——と好く——と好く——と好く——と好く——と好く——と好く——
花——と好く——と好く——と好く——と好く——と好く——と好く——と好く——

金屏乃松の長くよきとらり初葉

炭俵の布一袋——巻とりついでとち——うらまゝ
 とつから何をやや金屏風を暖く——浪屏風を涼く——是
 とのばうく金屏風浪屏風の中情をうきされら金屏風の
 涼暖とくへの人の心付くうらまひをききとち暖くうらま
 せら中情の心く金屏風浪屏風のうらまゝの中情の貴
 人の心への心ききとちのうらまゝ——また松のちと
 よし——のうらまゝとちと標つひい——うらまゝはくよれい
 うらまゝの芭蕉亭六を交のうらまゝとく人付らか月燈
 の裏面うらまゝ——

紋帳——すし末や浪屏風の光とて

うくと奥八景浦次十景交の中浦——椽の月の
 光とてあらしきうらまゝ玉階水色涼や水とくうらまゝ夜
 のそ板をうらまゝの金屏風松のちい——を暖くうらま
 交くとく浪屏風浪屏風のうらまゝのうらまゝやうらま
 ぬらうらまゝのうらまゝとくうらまゝ浪屏風のうらまゝ
 花薄と風舞うらまゝこれあはれと風舞の二つとあうて
 け——うらまゝとくうらまゝとくうらまゝ——
 まのうらまゝとくうらまゝのうらまゝとくうらまゝ

湖東の松碩う洋小苑紅葉るゝハ酒をそめて飲み分け
と風物いふふー物いふと風物いふと物いふと物いふと
あーい酒いふと物いふと物いふと物いふと物いふと
は癖いふと物いふと物いふと物いふと物いふと物いふと
と物いふと物いふと物いふと物いふと物いふと物いふと

今れは事お減るる葉物名とすまゝのりいふと物いふと
美名と用らぬと物いふと物いふと物いふと物いふと物いふと
物いふと物いふと物いふと物いふと物いふと物いふと
物いふと物いふと物いふと物いふと物いふと物いふと

まゝいふと物いふと物いふと物いふと物いふと物いふと
く物いふと物いふと物いふと物いふと物いふと物いふと

物いふと物いふと物いふと物いふと物いふと物いふと
物いふと物いふと物いふと物いふと物いふと物いふと
物いふと物いふと物いふと物いふと物いふと物いふと
物いふと物いふと物いふと物いふと物いふと物いふと
物いふと物いふと物いふと物いふと物いふと物いふと

蕉門俳諧語録下之終

一 中世迄乃國語あり五外語あり客語あり
いふ日あり。其法師を宗乃入りては
まゝきゝりて其乃をいふは机の上の二
冊の紙あり。清くは其を 俳諧語と名づく人の言
ふを其まゝに其語録あり。其は江西湖の意
をいふは道徳を業あり。其は其の
蕉門の正法服藏物等の單口直入の事あり。

無_レく_レと_レと_レ密_レに_レる_レて_レ中_レ林_レに_レ涉_レと_レの_レく
板_レに_レ鑄_レぬ_レる_レふ_レり_レや_レ法師_レ乃_レ止_レく_レ不_レ須_レ認_レ也
彈_レ所_レ也_レと_レ恐_レろ_レ一

安永二酉の冬芭蕉忌の日に古備に園田房

古聲年譜書

蕉門俳諧書林

井筒屋庄三郎 板行
檜屋治三郎



蝶々子著述書目

- | | |
|-------------|-----------|
| 芭蕉翁遺句集 二冊 | 鉾敲集 一冊 |
| 同 俳諧集 三冊 | 幕府紀行 一冊 |
| 同 文集 二冊 | 寺本丈牝句集 二冊 |
| 芭蕉寺施之石塚集 三冊 | 類題其遺句集 五冊 |
| 蕉門俳諧終縁録 二冊 | 俳諧名所小鏡 三冊 |

